

Title	死の河の探検
Author(s)	E. C. スミス
Citation	地球 (1925), 4(3): 239-242
Issue Date	1925-09-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/182993
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

死の河の探検

E・C・スミス

『リオ・ダス・モルテスの探検に行つて生きて歸つて來た者は一人もない』かういふ傳説が伯刺西にあるアマゾン河に隣つて、伯刺西の中央部を灌溉するアラグワヤ河の支流が Rio das Mortes (死の河) なる恐ろしい名を以て呼ばれるやうになつたのはこの哀しい傳説のためである。何故この河に近づいた白人で今日まで命を失うして歸つた者がなかつたらうか、それはこの河を護る慥悍なシエルズンテ印何人 *Cheranté Indians* が叢林に身を潜めて、毒矢を射てこの地域への侵入者を一人残さず殺すからである。この矢は動物の大腸骨の末端を研いで刺刀の如くに鋭くしたものへ或る植物を熬留して得た猛毒を塗つたもので、この毒矢に射られた者は數分間にして命を失ふといはれてゐる。伯刺西の印何人部落の多くではかうした毒矢が専ら用ゐられてゐる。

シエルズンテ印何人が斯の如く白人に對して殘忍なるには一應の理由がある、それは今から何百年かの昔にこの地域を征服

した西班牙人が、この河の中流に潜みて存在する豊富な金鑽を採掘するために此印何人を奴隸として虐使したからであつた。しかしいつまでも彼等の虐待に甘んじてゐるこの出来なかつたこの印何人は、或る時暴動を起して西班牙人を襲殺し、その時以來何百年間、彼等は嘗に白人のみならず、隣接する部落の印何人に對してさへもその地域の門戸を鎖してしまつたのである。

シエルズンテ人は敵を殺せば先づその首を刎れ、膾炙噂を除いて顛頂へ烙いた礫と砂を填め、蠟で作つて着色した義眼を挿入し、そしてそれを、傳來の方法に依つて植物から作られたらしい琥珀色の防腐液の中へ漬ける、これが彼等の最も貴い戦利品である。

『死の河』は世界に於ける最も闇黒な地域への國である。それを越えた伯刺西のマット・グロツツの山野叢林には文明人に全く知られてゐない幾千方哩の地域があつて、そこには人を殺戮することを以て美術の一つさでも考へてゐるらしい未開の人種が棲んでゐる。白人が海岸から段々に侵入するにつれて彼等は陸地奥深く近れ、そしてその跡には、彼等の生活と習慣とを圍繞して様々の不可思議な傳説が残されてゐる。

人の入ることの出来ない叢林の奥深くに棲んでゐるさういふ偉儒の印何人の傳説、男子とは僅かの期間同様して、生れた男兒は悉く殺害するさういふアマゾン女人國の傳説等、みなかうして生れたものである、しかし傳説よりも更に奇怪で怖ろしいのは現實に於けるこの地域の蠻人である、シエルズンテ印何人が殘

忍な方法を以てその領域への侵入者を殺害することは前に述べた通りで、ムンヅルク人 *Mundurucos* もまたその犠牲者の首を刎れ、ガギアオ人 *Gaviao* は長さ八呎もある弓を使つて毒矢を射る、カラジヤ *Carajas* カヤボ *Cyrtos* ボロロ *Bororos* 等の印何人ば上記のものほどに獠猛ではないが、また決して氣を許すことの出来ない蠻族である。

紐育市の探検者俱樂部及び並米利加印何人博物館のために若干の蒐集を試むべく、私はこれらの蠻人の部落を訪れたのであつたがカラジヤやカヤボの印何人は比較的平和な生活をしてゐたやうであつた。彼等は玉蜀黍を栽培し、野生の木棉を紡ぎ煙草を愛好し、煙草や南京玉や裝飾を興へる白人に對して、彼等に害を加へるものでないさ考へたときには、可成りに好意を表した。しかし血腥いシエルザンテ印何人は白人に對しては如何なる場合にも好意を示すやうなことはない、彼等は素晴しく美しいハンモックを編んでそれに寝るが隣棲する部落さへ物品の交換などしない。

これらの蠻人の部落は未探検の伯刺西の荒野の東側即ちアラグアヤ河の上流に沿ふたところにあつて、そこから三百哩餘りの叢林を越えたところに白人の他の前線がある、それは曾てセオドア・ルーズベルトに依つて探検せられた河で、ルーズベルト河 *Rio Roosevelt* やカヤボドア河 *Rio Theodore* や、或は『疑問の河』 *River of Doubt* とか様々に呼ばれてゐる河である。

『死の河』と『疑問の河』との間には如何なるものが横ばつてゐるか、それを知つてゐるものは一人もない。そこは前人未踏の間

黒地である、しかもそこには夜光珠や黄金や稀有の礦物や貴重な藥草などが殆ど無盡に藏せられて、そしてそれが獠猛な印何人の毒矢と、毒蛇の牙と、毒草の刺と、毒蟲と、人を喰ふ猛獸と、熱病とに依つて堅く守られてゐるさ信ぜられてゐる。そこは比倫なき自然の美の國である、しかし白人をそこに誘ふものは自然の山野の美觀にあらずして傳説して談らるゝ無盡の富である。

私はアラグアヤ河の上流に當るレホスト *Lecho* から『死の河』を下らんと企て、獨木舟を操つて、アラグアヤ河の中央に長さ二百十哩に亘る處女叢林を有して横ばる世界最長の川中島であるバナナル島 *Iha de Bananal* に達し、こゝで煙草と赤砂糖とを以て原始的なカラジヤ印何人の晝間だけの歡心を買つた致て晝間だけさいふ、私は夜の會議に彼等が晝間の考へを翻へすことを恐れた、それ故私はあらゆる忠告を排して夜は一人で河の眞中で獨木舟の中で寝た、私は印何人の危険よりも毒蛇の危険を撰んだのである、こゝに住むスルク *suru* と呼ばれる大蛇はその長さが三十呎もあつて、舟中の人をさへ襲ふさいはれてゐる。

間もなく私は小心なカラジヤ印何人中から船員を募ることが出来たので、バナナル島から引返してリオ・ダ・ス・モルテスを溯つた、私の一行は五日の間この河を溯つたが、そこには盡きぬ平和の樂園が横ばり、燃ゆるやうな美しさで罩められてゐた。兩岸は緑の森を以て包まれ、絢爛たる葛の花がそれを點々として彩り、黒の板のやうな水の面には眼の覺めるやうな鳥羽の羽

毛と錦のやうな蝶の翼さが萬花鏡の如くに反映し、岸に滑ふた岩の上には無數の紅鶴が、赤、緑、紫、藍の薄色の羽毛を見せびらかして肅然として立ち、また流れにさしかゝつた樹の枝の上には大山猫がその優雅な體をしなやかに横へ、その下には数知れぬ魚の群が、水面に泛ぶ花辨を追ふて銀鱗を跳らしてゐた。靜寂な『死の河』は平和そのものであつた。しかし私達は緑の葉蔭に身を潜めたシエル・ガンテ・印甸人の鋭い眼が絶えずどこから私達の行動を監視してゐるさういふ無氣味な感から免れることが出来なかつた。あちらの木蔭から、こちらの森から、時々立ち昇る合圖の煙は明かに私達の侵入に對する動員の信號であつた。かうして第六日の朝となつた、私の冒險はこれから始まる矢時が、鐵砲の音、棍棒の唸り、投げ槍の飛び交ひ、蠻人の叫喚、私はこゝに凄じい自兵戦を描き出したい。だがさういふことは決してこのマツト・カロツツでは起らない。狡猾なシエル・ガンテ・印甸人は靜かに毒矢を以て萬事を片附けてしまふことが得手である。

餘りの静けさに私達はつひ欺かれて河の曲り目にさしかゝつた時捷徑をさらんとして禁斷の岸に近い。すると此時、河中に何か落ちた音がした。そこから恐ろしい第一矢が颯められたのである。續いて二つ、三つ、空氣に陰慘な響きが傳はつて毒矢が私達の乗つた獨木舟の間近かに落ちた。忽ち舟中のカラ・シア・印甸人の間からヒステリカルな叫び聲が擧つた、そして獨木舟は恐慌に襲はれた彼等に依つて河の中央に向つて轉覆せん許りにして漕ぎ出され、一しきり毒矢は雨の如くに降り注がれ

死の河の探検

て舟の周圍の水を切つた。

それでも私は私達の襲撃者の姿を認めることが出来なかつた。緑の地色に眞紅の花を以て彩られた河の兩岸は依然として天國のやうに靜かであつた、そして僅かに葉蔭に滑ふて滑る裸形の人影のやうなものが瞥見し得られたのみであつた。私がそれを見究めんとした時、第二の毒矢の一齊射撃が樹木の頂上から、葦の葉蔭から、私達を目宛てて行はれた、そしてその一は私達の獨木舟の中に落ちた。この矢のために擦傷でも負へば私達は忽ち苦悶して死なねばならぬのである。しかし私は拳銃の曳き金をひくことをさし控えた。銃聲が彼等に與ふる恐慌は恐らく他の伏兵の活動となるであらうと私は考へたのであつた。

此時には舟は既に河の眞中へ出てゐた。こゝまでは彼等の毒矢は達しない。そこで私は舟を停めさせてアラ・シア・印甸人と色々謀つたが、彼等は私のいふところには少しも耳を藉さなかつた。流れ矢が一本水流に漂ふた、カラ・シア・印甸人の一人はそれを見るさういふ水の中に飛び込んでおつかなさうにそれを舟に持ちかへり、議論の餘地なしはいはんとするかのやうに、毒の塗られたその鐵を怖ろしげに私に示した。乏しい印甸人の語彙を以てする私の主張は彼等の異同音の否定の聲に壓倒されてしまつた。かうなつては彼等を賤し宿める手段はない、今如何なる運命に當面してゐるかを彼等はよく知つてゐるのである。強ひて事を行はんとすれば彼等は背叛し暴動するであらう、私は彼等の希望に従はねばならなかつた。

かうして私は『死の河』から空しく歸らなければならなかつた

往路には五日を要したが、歸路は僅かに二日で足りた、さほどに彼等は毒矢から免れることを喜んだのであつた。

これから二、三箇月を経て今私は再びシエルバンテを訪はんと企てゐる、しかし前の失敗に懲りた私は別の方法をさうと考へてゐる、それはホロロの部落を通じてこの探検の目的を達せんとすることである。ホロロの部落は時々僧侶其他の白人に依つて訪れられてゐる、従つて彼等はよく白人に知り合ひを私に暫くホロロの部落にあつてシエルバンテ印何人に贈りものをするの機会を發見して彼等の了解を求めんとしてゐるのである。

『死の河』を渡らんとするに先立つて私は或る日數をカラジア印何人中に送つて彼等の使用する武器や什器や服裝の標本を蒐集したが、これらのものは伯刺西印何人部落に可成り典型的なものであつた。外貌に於てカラジア印何人はポリネシア型に近く、身長に於て北亞米利加の初期の印何人より遙かに低い。酋長は概れ體軀が大である、しかし男子の平均身長は五呎六吋女子は五呎二吋である。男女共に體格はよく整ひ、手首及び足首が細く、手足共にその體軀に相當してゐる。總じて男子は筋骨逞ましく、若年の女子は優雅で敏捷である。顔は一般に圓味を帯びてゐるが中には顴骨の特に秀でゐるものがあり、眼は黒くて鋭く稍々下り氣味で、鼻梁が恰好で、頭髮は黒くて縮れてはゐないがその粗なること海草の如くである。すべて斷髪で一様に耳の上部からぐるりと刈られてゐる、それは刃物で切られるのか或は火を以て焼き切られるのであるか、不幸にして理

髪の方法は知ることが出来なかつた。

皮膚は『布哇赤色』として普通に知られてゐる色合であるが、彼等はそれを種々の顏料を以て奇怪な模様にするから、裸體であつても彼等は假裝舞踏會に参加するために未來派の圖案になる體にべたりとついてゐる服裝を着けてゐるやうに見える者が往々にある。また子供は屢々その身體の全部を或る植物の實の漆黒の液汁を塗つてゐることがあるから一見黒人種と見誤れる。カラジア印何人は未だ刺青を行ふほど美的技術を獲得してゐないがその代りに男子は鋭く研いだ骨片を以て彼等の脚や腕を掻いて永久的な傷痕を附ける、しかしこれは裝飾を目的として行はれるものではなくて、かうすれば手足の働きが敏捷になることを信ぜられてゐるからである。彼等はまたその下唇を貫いてそこに木片を挿入する、或は、子供の場合には、貝殻で作つた飾りを挿入し、その内側に小さな釘を附して引つ張つても脱け落ちぬやうにする。男女共に眼の下を半弗貨大の環狀に焼き、みな耳環を着けてゐる、この耳環は貝殻又は動物の骨で作られて、青色を帯びてゐるのが普通である。

秋田縣に新温泉を發見す

奥羽本線富根驛を距る一里の駒形と約半里隔つる湯の濱の二箇所温泉が發見された。共に地下百八十間て華氏百三十度の温度があり、鹽類泉に屬すると云ふ。